

活動報告**学園研究費 B によるイベント報告**

長 澤 唯 史

本年度の学園研究費 B で、「日本 SF の領域横断的研究と情報発信の場の構築をめざして」と題した研究を申請し、お認め頂いた。本研究は主に様々な立場の方々をお招きして、SF というジャンルの可能性を探る意見交換や情報発信を行うというものである。

具体的には二つのイベントを企画した。(1)「名古屋 SF シンポジウム 2018」、(2)「ジェンダー／セクシュアリティをめぐる対話 再び」である。

(1) 名古屋 SF シンポジウム 2018

2014 年から毎年開催されている名古屋 SF シンポジウムが、今年度も 9/29 (土) に開催された。本年度は「SF フューチャー&パスト」という全体テーマの下で 2 部構成とし、現在・過去・未来に跨る内容の二つのパネルが行われた。

まず一つめのパネルは、SF 作家の上田早夕里氏を招いての、「自作を語る《オーシャンクロニクル》から『破滅の王』まで」というトークイベントであった。レビュアーの渡辺英樹氏を司会として、デビュー作から始まり、最新作で直木賞の最終候補作となった『破滅の王』まで、上田氏の長い作家としてのキャリアを辿りながら、SF というジャンルの過去と未来について考えるというものであった。とくに上田氏のデビューに大きく関わった故小松左京氏との交流など貴重なお話をたくさん伺うことができ、過去から現在へとつながる日本 SF の在り様を俯瞰する刺激的な内容であった。

続いて、「『2001 年宇宙の旅』公開 50 周年」と題されたパネルでは、中村融氏 (翻訳家)、添野知生氏 (映画評論家)、の二人のパネリストに、司会の片桐翔造氏 (レビュアー) を加えた 3 名が、もはや伝説となった 1968 年の映画『2001 年宇宙の旅』(スタンリー・キューブリック監督) について、最近発見された新資料などを基に新たな光を当てていった。本パネルの充実した内容は参加者にも極めて高く評価され、後日早川書房の『SF マガジン』編集部より、本パネルの再録の打診があった (残念ながら、記録を残すことができなかったため依頼にこたえることができなかったが、中村氏と添野氏がほぼ同じ内容でこのトークの内容を再現するイベントを行った)。

参加者は 80 名ほどで、遠方からの参加者に加え、双葉社や講談社の上田氏担当編集者の方々も足をお運びくださり、本イベントを意義深いものと高く評価していただいた。

(2) 「ジェンダー／セクシュアリティをめぐる対話 再び」

昨年の12月に翻訳家・テクニカルライターの大野典宏氏をお呼びして開催された公開講座「SFとジェンダー／セクシュアリティをめぐる対話」は、参加者の方からたいへん好評を博した。そこで今年度も同じく大野氏をお迎えして、現代社会における女性や性的マイノリティの問題を、今回は学生との対話を通じて考える場とした。

大野氏はロシア／東欧SF翻訳家、SFライターで、スタニスラフ・レムやストルガツキー兄弟など東欧圏SFの翻訳紹介に長年携わっている。また『SFマガジン』にてコラム「サイバーカルチャートレンド」を連載中で、IT関連や武道、ロシア事情全般に関する訳書や編著も多数ある。さらに東欧圏のSF関係者との交流にも尽力するなど多方面で活躍中であるが、一方で地震がLGBTであることを公言し、その立場から性的少数者の社会的問題についての活動や発言も積極的に行っている。

12月21日（金）の午後に、国際コミュニケーション学部棟505教室で開催し、約10名の学生が参加した。今回は大野氏に加え、名古屋市でDV被害者のケアなどに関わっている現役看護師の方にもご参加いただき、現実の女性や性的マイノリティをめぐる社会的困難やその救済についてお話を伺うことができた。

こうした現実の問題とSFという空想ジャンルがどうかかわるのか、SFという表現形式がどのように役立っているのかなど、当事者ならではの視点から様々な事例が紹介され、学生からも大変興味深かったと好評であった。